

日本女子大学人間社会学部教育学科・教育学科の会共催  
日女祭同日企画 講演会  
唐澤富太郎と博物館  
— 学校教育・社会教育における博物館利用の可能性 —

Japan Women's University Symposium:  
Tomitaro Karasawa and Educational Museum  
15th October, 2016

齋藤慶子、吉崎静夫、唐澤るり子、渡邊 巧、田中雅文  
Keiko Saito, Shizuo Yoshizaki, Ruriko Karasawa, Takumi Watanabe, Masafumi Tanaka

## I. 講演会の概要

2016年10月15日(土)13:00-17:00に、日本女子大学西生田キャンパス九十年館A棟第1会議室において、日本女子大学人間社会学部教育学科・教育学科の会共催による講演会(日女祭同日企画・ホームカミングデイ)「唐澤富太郎と博物館-学校教育・社会教育における博物館利用の可能性-」を開催した。講師は、唐澤富太郎先生の三女で本学科卒業生の唐澤るり子氏(唐澤博物館長)であった。

本講演会は、教育学科専門科目「プロジェクト実践演習Ⅱ」(授業担当教員:齋藤慶子・渡邊巧)の受講生(教育学科3年生:松澤里奈・三橋柚希乃)を中心として、企画立案・事前準備がおこなわれた。また、当日の運営は、教育学科の会・学生委員が担った。講演会のスケジュールは、以下の通りである。

### [スケジュール]

1. 開会の挨拶:吉崎静夫(日本女子大学教授)
2. 講演「唐澤富太郎と博物館」  
講師:唐澤るり子(唐澤博物館長)  
司会:齋藤慶子(日本女子大学准教授)・渡邊巧(日本女子大学助教)
3. 御礼と閉会の挨拶:田中雅文(日本女子大学教授)



写真1 講演会の様子

当日は、教育学科1年生や卒業生の方々を中心に、約60名もの参加者があり盛会なものとなった。また、本学の片桐芳雄名誉教授も出席され、専門的な知見からの意見も寄せられた。以下に講演会の記録を示す。なお、紙幅の都合上、内容を加工・編集している。

## II. 開会の挨拶

只今より、「唐澤富太郎と博物館」を開催致します。私は、本会の前半の司会を務めさせていただきます教育学科教員の齋藤です。後半の司会は、同じく教育学科教員の渡邊先生にお願い致します。では、初めに教育学科の会、会長の吉崎静夫先生に開会のご挨拶を頂きたいと思っております。

吉崎です。5年後に、人間社会学部は、目白台へ

戻りますけども、20数年前、人間社会学部が出来まして、その時、学部と共に大学院（修士・博士）も全部作るということで。無謀というか、まあ、新学部ですから創設しないとけない。問題は博士課程なんですね。博士課程を作るのは大変でして、博士論文の主査が出来る方、ドクター丸合っていうんですけども、この教員が各専攻4名以上ないと作れないんです。教育学科は、最初から7名もいたんです。

石川松太郎先生が日本教育史の教授だったんですけども、2、3年でちょうど退職でありまして。それを繋がないといけないので。じゃあ、どうしようかとなった訳ですね。まず関東地方で誰がいるのかというので、ドクター丸合取れる人が。入江宏先生という宇都宮大学の学部長をされて、学長候補だった方なんですね。その方を説得して頂く時に、まあ、定年前に来ていただいたんですけども。入江先生が来られる理由がね、唐澤富太郎先生が東京教育大学の先輩であり、恩師であるので、だから来るということだったのです。その後が、今日、お見えの片桐先生です。日本教育史というのは、本学の教育学専攻の中でも最も大事な専門分野なのです。私も唐澤先生のお名前は存じておりましたけども、そんなに凄い先生なんだというのを入江先生から伺いまして、あーそうなんだと思いました。今日お嬢様が、唐澤先生のお話をしてくださるということで大変嬉しく思っております。片桐先生も、ありがとうございます。これで私の挨拶にさせていただきます。

### Ⅲ. 講演会の趣旨

#### 1. 講師の紹介

吉崎先生、ありがとうございます。唐澤るり子氏は、吉崎先生からお話がありましたけども、唐澤富太郎先生の三女でいらっちゃって、本学の教育学科の卒業生でいらっちゃいます。卒業後、出版社に勤務された後、平成5年に設立された唐澤博物館の立ち上げから携わられていて、現在は唐澤博物館の館長でいらっちゃいます。

#### 2. 唐澤富太郎先生

続いて、唐澤富太郎先生について、簡単にご説明

いたします。唐澤富太郎先生は、1949年、昭和24年から東京教育大学の日本教育史の担当教員として勤められました。その後、東京教育大学を退官後、1980年まで日本女子大学文学部教育学科の教授として在職されていました。唐澤先生のご業績というのは、日本の教育研究の系譜を語る上で、欠かすことの出来ないものです。

唐澤富太郎先生は、1950年代には、教育史における学校中心の歴史観というのを批判して、学校外の子どもの学びや遊びといった生活から歴史を語る必要性を主張されていました。これを「生活教育史」といいます。そして、人間の生活を具体的な資料や実物を積み上げながら描いていく、唐澤教育史学を打ち立てられました。

本日は、唐澤博物館についてのお話を伺い、唐澤富太郎先生とはどんな研究者だったのか。それから、唐澤博物館とはどういう場であるのか、ということについて皆さんに考えて頂ければというように思います。

### 3. 配布資料等

それから、受付でお配りしたクリアファイル、そして今、テーブルの上に置かれているケーキについて、少しでも説明させていただきたいと思います。

ファイルとケーキなんですけども、今年から大学で新しい授業が始まりして、「プロジェクト実践演習Ⅱ」といいます。その中で、学生がデザインしました。その蜂の絵については、触覚のところから、Eで、目がDになって、口がUになっていて、これでEducationのEDUで、エデュちゃんとは命名しておりました。ちなみに、そのケーキは、ロンドンで有名なカップケーキ屋さんが日本で唯一、原宿にオープンしているのを注文して、昨日、渡邊先生と一緒に運搬して参りまして、ご堪能していただければと思います。ファイルは記念にお持ち帰りいただければと思います。それでは、ご講演をお願い致します。

### Ⅳ. 講演「唐澤富太郎と博物館」

#### 1. はじめに

ただいまご紹介にあずかりました唐澤です。よろしくお願ひします。本日は「唐澤富太郎と博物館」

という、私にとっては願ったり叶ったりのテーマを頂戴しましたので、張り切ってやって参りました。

父は生きていれば今年105歳、活躍した時期は、半世紀も前になりますので、学生の皆さんにとりましては、もう遙か昔のこと。ご興味を持っていただけるのか心配ではありますが、「過去は未来の先生」とも言います。今日はこの講演を通して、女子大学の関係者にこんな人もいたんだということを知っていただき、父が考えてきたことを少しでも、皆さんにお伝えできればと思っております。

いつもは博物館でモノを見ながら話しをしていて、今日はアウェー戦という感じで、緊張もMaxですけれども、先生が私のために本当に親身になってくださり、このようなパワーポイントを作って下さいました。このパワポを頼りに、お話しを進めさせていただきたいと思っております。

## 2. 女子大との関係

本題に入る前に、女子大との関係を少し話させていただきます。私自身は附属中学から大学まで10年間お世話になりました。大学3年生の時に、父が教育学科の専任教授として就任しました。その年の創立記念日に成瀬講堂で記念講演をしております。

これが、その時の写真ですね。ここにいますのが父です。新入生を対象としておりましたので私は聞いていないのですが、この講演内容を収録した「女子大通信」が残されていたので、読んでみました。今年にNHKの「あさが来た」で成瀬先生が随分注目されました。皆さん、ご覧になりましたでしょうか。私も皆勤賞をいただけるくらい、ちゃんとみました。成瀬先生、女子大設立のために奮闘していらっしゃいましたね。父の講演の中でも、「先生の教育精神」という本題に入る前に、成瀬先生が東奔西走なさったご様子について触れております。そのお姿はフロックコートをお召になり、山高帽を被っていらっしゃったそうです。フロックコートというのは、結婚式で新郎が着るような洋服ですから、かなり気合の入ったお召し物ですね。人力車に乗りますと費用がかさむということで、自転車を買われて、理解を得られそうな方のところへ、何べんでも何べんでも、足を運ばれたそうです。先生に来られた方々の間では、「成瀬の長つ尻」つまり、先生が腰かけて話し出したらなかなか帰ってくれない、と評

判になってしまうほど、その信念と情熱を語られたそうです。

父は、そんな先生の業績、そしてもちろん教育精神を大変高く買っておりました。慶応義塾の福澤諭吉、同志社大学の新島襄と並んで、私学教育の三羽烏と評価しております。私も、そんな女子大学で学べたことを大変光栄に思っております。

## 3. 研究者への道

### (1) 出雲崎時代

ここから本題ですが、今日は4つのことをお話ししたいと思います。1つ目が研究の道筋について、2つ目が博物館の資料のご紹介、3つ目が父の人となり、人物像について、4つ目が博物館設立の経緯についてです。

まず、研究の道筋について簡単にお話しします。父は明治44年に新潟県の出雲崎で生まれました。今年の夏、父の故郷を見てみようと思ひまして、私、初めて出雲崎に行つて参りました。佐渡島が望める日本海に面して、その海岸線に沿って3キロ程の小さな家が立ち並ぶといった街並みです。どこにいてもパノラマの海が開けていまして、雄大な気分になるところです。お米とお魚とお酒が美味しくて、とても良いところだと思ひました。父が敬愛する良寛さんの出生地でもあり、こういった故郷が父を育てたのだな、と実感することができました。

親戚の方にお話しを伺ったのですが、地元では「富太郎さん伝説」なるものがあつたそうです。子どもの頃から知的な好奇心が旺盛で、分からないことがありますと、納得ができるまで質問したそうです。周りの大人が分からないとなりますと、遠くにお住まいの校長先生のお宅まで伺つて、質問をしたこともあつたそうです。

### (2) ドイツ教育哲学

14歳で上京して、豊島師範学校に入学します。その後、東京高等師範学校、東京文理科大学と進んでいきます。どの学校も皆さん、あまり馴染みがないかと思ひますけれども、東京文理科大学というのは、父が勤めていた東京教育大学の前身になります。東京教育大学は、今の筑波大学の前身です。この学校、元を辿りますと明治5年、日本で最初にできた師範学校なのです。ですので、教育に関する研



写真2 博物館に掲げられたカントの句  
（唐澤るり子氏提供）

究においては、日本で一番と父は自負していたように私には思えました。

その間、何を研究していたかですが、最初の頃はドイツ教育哲学です。カントやヘーゲルといったドイツ語の原書が日記代わりになるほど、原書を読み込んだそうです。このドイツ哲学を学んだことというのが、博物館にも活かされています。

博物館の正面、外壁の天辺にカントの言葉が掲げてあります。亀の子文字という装飾体で、ちょっと読みにくいですし、しかもドイツ語は大学時代にちょっと齧っただけ、間違っていれば教えてください。

「Der Mensch kann nur Mensch werden durch Erziehung」  
「Mensch：メンシュ」は人間ですね。「kann：カン」は英語の can、「nur：ヌーア」は、only ですね。「werde：ヴェルデン」というのは何々になる、「durch：ドゥルヒ」は、何々を通して、「Erziehung：エアツィーング」というのは、教育という意味です。日本語になおすと、「人間は教育によってのみ人間となることができる」。つまり、人間にとって、それ程、教育が重要だという意味です。父は、博物館の精神が一番適切に表されているのが、このカントの言葉だと思い、ここに掲げました。

### (3) 仏教教育哲学

戦時中は、奈良女子高等師範学校、今の国立の奈良女子大学の教授となって赴任します。薬師寺や法隆寺といった名利に囲まれて没頭したのが、仏教教育哲学です。学位論文も、親鸞、道元、日蓮といった中世のお坊さんの教育思想を研究して、学位を

取っております。仏教は研究していて、とてもしっくりくるものがあつたそうです。そもそも、郷土の出雲崎は、浄土真宗が盛んな土地でしたので、小さい時から自然と仏教に馴染んでいたようです。

また赴任先の奈良では、薬師寺の管主さん（橋本凝胤元管主）に弟子入りをして、直接、御高説を伺う機会がありました。時には、福井県の永平寺に行き、特に許されて、参禅もしたそうです。座禅を組んだり、お話しを伺ったりするなど、身体を通してより実感的に追究できるということで、仏教は父の性分にとっても合っていたようです。ですので、仏教は研究の対象としてばかりではなく、自らの生きる上での指針ともなっております。

「一日不作一日不食」、この言葉「一日なさざれば、一日食らわず」と読みます。唐の禅僧、百丈懐海（ひやくじょうえかい）という方の言葉ですが、この言葉を筆で大きく書きまして、仕事部屋に掲げていました。もし一日、やるべきことが出来ない日には、食事も絶つとといった覚悟ですね。こういった生活が、1年365日、盆も正月もなく続くわけです。大晦日には、除夜の鐘を聞きながら、原稿用紙と向き合うのを恒例としておりました。

私が子どもの頃は、テレビを見ていると研究の邪魔になるといって叱られますので、紅白歌合戦も隠れて見えて、父が仕事部屋から出てくると、子どもたちは蜘蛛の子のごとく、自分の部屋に慌てて戻っていった、なんて生活をしておりました。

### (4) 生活教育史

昭和24年、奈良から東京に戻りまして、母校の東京教育大学の日本教育史の担当教官になりました。その4年後、昭和28年に『日本教育史』という本を出版します。その冒頭、新しい教育史を目指して10の提案をしております。

その第1の項目が、「生活教育史」の提案です。何が書いてあるか、ちょっと読んでみます。

「従来の日本教育史研究の最大関心は、教育の施設制度に注がれ、次にはいわゆる文化史的な教育史か、または先哲の教育思想に注がれたのであるが、今後最も多く開拓されなければならぬ領域は、家庭や村落や社会集団などにおける生活そのものを通して行われた教育形態の歴史であり、またあくまでも生活に即した教育思想の歴史の開拓であるといわな

ければならない」

これでワンセンテンス、とても長くて難解ですが、簡単に言うなら、従来の学校中心の教育史研究ではなく、もっと視野を広く持ち、生活全般にまで研究の範囲を広げるのでなければ、教育史研究としては不十分ではないか、と言いたかったのだと思います。

しかも、当時の研究と言えば、制度とか法令といった、いわば、為政者側が何を考えてきたかばかり研究をしていて、肝心の教育を受けた側の子どもが、研究の対象として抜け落ちていることに、気がついたわけです。もっと本来、子どもが注目されるべきで、子ども中心の教育史研究を開拓しなくては。そこで、それまで研究の対象としては見向きもされなかった子どもが書いたノートや作品、遊んだ玩具や人形、その子の暮らしである日本の伝統的な生活文化、そんなところまで範囲を広げて、研究を志したわけです。

#### 4. 唐澤博物館の紹介

唐澤博物館は、そういった視点で集めたものを展示していますので、本当にいろいろなものがああります。ここで、30点程、写真を撮ってきたのでご覧ください。

博物館は、このように自宅の敷地の一角に建っております。この丸くくり抜かれた中では、かつて校庭に立っていた二宮金次郎像が、来館者の方をお出迎えしています。先ほどご説明したカントの言葉がここに掲げてあります。館内は1階から3階までが展示室です。

##### (1) 1階の展示品

1階は、明治5年学制が頒布されてから明治・大正・昭和と日本の近代小学校の歴史が分かるように展示されております。

最初に、学校が始まった頃のものをご紹介します。これは、日本最初の国語の教科書『小学読本』です。この教科書、どうやって作られたのかというと、左のアメリカの教科書を翻訳したのです。文章は、大体が直訳ですが、野球の挿絵がちょっと面白いので紹介します。どこがおかしいかお分かりになりますか。こちらがアメリカの野球のシーン。で、こちらが日本の野球のシーン。なんか変です



写真3 唐澤博物館の外観



写真4 唐澤博物館の1階

ね。そうです、3人の子どもがバットを持っています。それからボールも2個飛んでいます。これは明治6年の教科書です。当時の人は野球を見たことも聞いたこともなかったでしょうから、この教科書を書いた人も、それから読んだ人も、全然おかしいと思わなかったのではないのでしょうか。

次に火鉢ですが、よくご覧いただきますと、今の野球のシーンを刷った版木を利用しています。当時は、板に文字と絵を彫りまして、それを版木といいますが、その版木に墨を塗り、その上に紙を置いて、馬車で刷って、綴じて、本を作っていました。3000枚も刷ると、摩滅してしまうわけで、使えなくなった版木を再利用して、こういった火鉢に仕立てたのですね。リサイクルの知恵は、この時代も活かされていたことが分かります。

明治の学校は、西洋式の一斉教授法を取り入れ、

教材として盛んに使われたのが掛図です。これは師範学校が作った単語図ですね。日本最初の掛図で、うちの館にしかなく、ちょっと自慢です。第三単語図と書いてあります。桃栗梨、それから、大根や人参といった果物とか野菜の名前や性質を、右の錦絵のように、教師が鞭で指し示しながら、生徒と問答形式で勉強しました。小学校に入って最初に勉強したのですが、ずいぶん難しい字があります。「大角豆」と書き、何と読むかお分かりになりますか。私も調べたのですが、「ササゲ」です。それから、これ一字（薑）で、「はじかみ」とか「しょうが」と読みます。

これは体操の道具です。体操が本格的に始まったのは明治11年、アメリカ人のDr. リーランドという方が、本国からこういった木製の亜鈴や棍棒を持ってきて、体操伝習所というところで、生徒に体操の仕方を伝えたのです。そこで教わった生徒が全国に散らばり、日本国中でこの体操がおこなわれました。棍棒ですが、この大きなものが男子生徒用です。小さいものが女子生徒用で、女子大で使われていたものだそうです。

これは、幻灯機というプロジェクターを通して、スクリーンに映写するために書かれたガラス絵ですね。明治20年頃になりますと、こういった視聴覚教育も行われるようになりました。渡邊先生が、皆さんに当ててもらおうと、ことわざを教えるために書かれたガラス絵を仕込んでくださいました。お分かりになりますか。そうです、これ、人の口です。「人の口に戸は立てられぬ」。下は、分かりますか。そうですね。「棚から牡丹餅」。それから、これ、どうでしょうか。今はあんまり言わないかもしれませんが、「腹ふくるる技」。言いたいことを言わずに、我慢しているとお腹が張ったような嫌な気分になる。それから、これも分かりますのですが、欲という字を崩して書いてあるようです。「欲に転ぶ」ですね。右は、修身と書いて、今の道德教育に使ったガラス絵です。

これが、その幻灯機で、学校で使用したのは、こんな大きな幻灯機だったのです。ここに、先ほどのガラス絵をはめ込むわけです。光源は石油ランプですから、煤が出るし、見にくかったという話も残っております。

明治の学校で使われていたピアノです。外国の製

品を日本で組み立てたものです。よく見ますと、ここに3つ、小さな穴が空いていますが、燭台の跡ですね。やはり部屋が暗いですから、ここに蠟燭を置いて、楽譜を見ていたのでしょう。こんなピアノが置ける学校はリッチな学校で、普通はこの奥にある風琴といわれるオルガンを使用していました。

大正・昭和時代のノートですね。ノートの表紙も、時代が表れていて面白いです。こちらは大正時代のノート、蛍の光で勉強しています。戦時中になると、神社の参拝が奨励され、ちょっと重苦しい表紙になります。ノートの中身を見ますと、先生の評価の仕方、授業の進め方なども分かり、なかなか興味深いと思います。

筆箱も、時代と共にいろいろな材質があります。こちらがセルロイド製ですね。こちらが革製です。この辺は紙製ですね。ここにあるのが戦後、戦闘機の廃材を利用して作られたジュラルミン製の筆箱です。ちなみに鉛筆が、学校でいつ頃から使われているのかを調べてみましたら、第一次世界大戦以降です。ヨーロッパが戦争で鉛筆を作れないというので、日本が輸出用に沢山作ったのですが、終戦と同時に、鉛筆が余って学校でも使うようになったそうです。

これは、戦時中のランドセルです。昭和13年に国家総動員法が発令され、物資が自由に使えなくなります。それまでは、豚革のランドセルもあったのですが、代用のランドセルとして、柳を編んだもの、ツルを編んだもの、紙製が登場します。

学生の皆さんもこれはご存知かと思いますが、墨塗り教科書ですね。戦後GHQの主導の下に、軍国主義的な内容、国家主義的な内容を、子どもたちに墨を塗らしたものです。

教育勅語と奉安殿は、戦前、学校で一番重要だったものです。教育勅語は、明治天皇のお言葉で、教育の大本を語られたものです。式日には、校長先生が白手袋をして、この教育勅語を捧げ持ってお読みになりました。全部で315文字ですが、1字読み間違えても首になったそうです。天皇陛下のお写真のことを、御真影といいます。御真影奉安殿の前を生徒が通る時は必ず、帽子を脱いで最敬礼をしなければならなかったそうです。火災の際には、この下にある非常用持ち出し背囊というリュックに、御真影を納めて避難させました。

## (2) 2階の展示品

2階は、時代が遡って江戸時代の寺子屋、文具や玩具を展示しています。

子どもの生活というのは、遊びを離れては考えられません。子どもは、遊びながら、多くのことを学ぶということで、玩具も沢山集めております。昔は、男の子の遊び方と、女の子の遊び方というのははっきり分かれておりました。

女の子の玩具は、やはり華やかで雅なものが多いですね。これは、貝合わせといって、蛤に絵を描きまして、神経衰弱的に遊んだものです。こちらに並んでいるのが、おままごとセットです。伝承的なごっこ遊びで、見様見真似でお母さんの仕事を疑似体験していたわけです。

こちらが男の子の玩具ですね。男の子の玩具の二大伝承玩具といえば、コマとメンコでしょう。こちらのコマは周りに鉄がはめ込んであり、相手のコマを豪快にはじき出すので、喧嘩ゴマとも呼ばれていました。男の子の遊びは、このコマのように勝負を仕掛けることが多く、勝つために子どもなりにいろいろ工夫をしていたのです。父は、「子どもの頃に遊びながら手先を使って工夫する、そのことが子どもの発達にとっても大切」とよく言っておりました。

天神様は、学問の神様です。寺子屋は天神信仰でしたので、全国的にこの天神人形が作られております。父もマイ天神、持っていたのですよ。自分の部屋に飾って「天神様、天神様、手を良くしてくんなまんしょ」。つまり、字が上手になりますようにと、いつもお祈りしていたと言っておりました。この大きな天神様も、普通のお家にありました。男の子が



写真5 唐澤博物館の2階

(唐澤るり子氏提供)

生まれると、お母さんの実家から送られてきたそうです。

こちらは、寺子屋の再現です。寺子屋では、「読み書き算盤」つまり本が読め、字が書け、そして算盤で計算をすることを学んだのですが、うちの寺子屋（栃木県真岡市にあった精耕堂）では作品が並んでいるように、絵も教えていました。ここ、師匠が座っていた机です。こちらにあるのが、寺子が座っていた机で、天神机と言います。

お習字の最初は、やはり「いろは」から勉強しました。安政2年といえますから、160年前の子どもの書いた「いろは」です。この赤が師匠の採点で「に」の字が松、「い」の字が梅、つまり、この師匠は、松竹梅と採点していました。

寺子屋では「席書き」といまして、お習字の発表会もあります。そういった際には、こうした大筆で書いたりしたようです。これは師匠が使っていた鞭です。鞭と言いましても、体罰的に使っていたのとは違い、コツンという感じで使っていたと父は言っておりました。それからこれは、字指し棒といいます。寺子屋は個別教授法、一对一の対面で教えますので、師匠は逆さから字が書けたそうです。「この字はね・・・」と逆さから本の中の字を指し示す時に使うのが、字指し棒です。

寺子屋で使っていた知恵板ですね。江戸時代からこういったプレートパズルがありました。19ピースに分かれていて、後ろの図形に組み立てるといった遊びです。右は、七巧図合璧と言いまして、正方形を分割したパズルです。

これは立版古と言いますが、切り込みの入った舞台で、この軸を持ちながら、拍子をとって上演したそうです。四谷怪談のセットで、裏にも絵が描いてあり、くると回したりして、意外に見えて怖かったのではないのでしょうか。

戦時中の文鎮です。金属を供出させられたので、竹筒に砂を詰めて作った文鎮です。右側は上海事変のヒーロー、肉弾三勇士をモチーフとした文鎮です。

おとぎ物も父はよく集めていました。桃太郎は、今では携帯電話ですっかりおなじみですが、元々室町時代から語り継がれてきたお話です。時代と共に内容も変化して、その変化の流れが面白いと、研究課題の一つにしていました。



写真6 唐澤博物館の3階  
(唐澤るり子氏提供)

### (3) 3階の展示品

3階は、生活教育史ということで、暮らしに関するものを展示しております。学びと遊びというコンセプトは他の館でも見かけますが、この暮らしまで含めた展示という点が、うちの博物館の特徴ではないかと思えます。

こちら、なんだか分かりますか。「いづめ」といまして、野良仕事の際に、畦道に置いたベビーベッドです。藁でできたベッドの中に赤ちゃんを寝かしていました。

日本の職人さんの用いた道具は、モノづくりの精神性の高さを感じるというので、父は積極的に集めておりました。

これは足袋屋さんの道具。こちらは下駄屋さんの道具です。こういった物の他に、輪島塗、染め物の伊勢型紙、宮大工の道具等、様々な仕事道具を集めております。

お菓子の型もあります。左がべっこう飴を作るための型。右が打ち菓子といって、落雁のような粉菓子を作る型です。

商家の帳面を大福帳といいます。福が来るようにということで、縁起担ぎで大福帳と名付けたのでしょう。こういうのを見ましても、江戸期の識字率の高さがよく分かります。この大福帳は、ノートの前身とも考えられますね。

火消しの人々が着た刺子半纏は、見た目以上に重たくて厚いものです。実はこれ、裏側です。火を消し終えまると、サッと裏に返しましてこの粋な恰好で帰って行く。火消しは江戸ギャルのヒーローだったそうですね。

最後です。旅行に行く時は荷物をコンパクトにしたいと、いつの時代も考えることだと思います。日傘も雨傘も、携帯に便利のように折り畳みができるようになっていきます。ハンガーや枕まで折り畳み式ですね。いかにコンパクトにするか、工夫が感じられます。

以上、七千点が実際には展示されており、その触りだけご覧いただきましたが、父が考えた生活教育史、少しお分かり頂けたのではないかと思います。

## 5. 人物像

3つ目の人物像ですが、博物館の十周年記念として、『愚徹』という本を2005年に出版しました。自身は、父の自叙伝、業績紹介、家族と教え子の方の寄稿文等で構成されております。私家版して百冊刷ったのですが、その寄稿文の中で皆さんが書いていることが、父が根っから仕事人間だった、ということなのです。



写真7 唐澤博物館十周年記念誌『愚徹』

### (1) 母からみた唐澤富太郎

母は研究の助手として24時間休みのない私設秘書のような生活を送っておりました。母の書いた文章を少し読ませていただきます。

「今、九十余年の主人の人生を見て感じることは、骨の髄から研究者だったということです。極限すれば、研究以外のことに力を使うのは浪費であり、邪道だとも考えていたと思います。・・・とにかく学問研究への情熱、精神の逞しさ、粘り強さ、そしてやりかけたことは必ずやり遂げるまでやり抜く、それはどんな障害物があっても前進、猛進してやまないのですが、ここに、主人の“鬼”さながらの気迫があり、個性の強烈さが感じられました。」

さすがに、長年連れ添っただけあって、実感のこもった文章です。



これ以外に、婚約時代に研究者の伴侶とはどうあるべきか、父から3つ程言い渡されたことが書いてあります。

1つ目は、我が家はあくまでも、研究を優先させること。

2つ目は、妻は縁の下の力持ちに徹すること。

3つ目は、快樂を追うものは快樂を得ず。仕事に充実した日々こそ、真の快樂はある。

私でしたらこんな事いわれたら、即婚約破棄にしますけれども。特に許せないのは、「快樂を追うものは快樂を得ず」ですね。つまり、美味しいもの食べたいとか、温泉に行きたいとか、そんな事を望むなど言われている次第で、真の快樂は、研究にあると勝手に断定されてしまったわけです。母は、健気にも棘の道という未知の世界に挑戦したかった、とって結婚するわけですが、現実は想像以上に大変だったそうです。何しろ研究第一ですから、お給料や講演料など頂戴しても、ほとんど本代と資料代に化けてしまいます。家計はいつも火の車、子どもの制服もオーダーで作れなくて、母が見様見真似で手作りしたといえます。お金の件では、本当に苦勞させられればなしで、いろいろ波風は立っていましたけれども、それでも研究者としての唐澤富太郎を一番に認めていたのは、間違いなく母だったと思います。

## (2) 娘からみた唐澤富太郎

父の口癖でよく覚えているものが、2つあります。

1つは、「黙って喋れ」。我が家は娘が3人、母を合わせて女性が4人います。女という字を3つ書くと、姦しいですね。それに1人加わったのですから、父からすればさぞ、うるさかったのだと思います。話に花が咲くと「黙って喋れ」。まあ、うるさいとか言わないで、この禅問答のような言い方をするとところが父らしくて、懐かしい言葉です。

もう1つが「引っかけたら鬼だぞ」。これは研究に向かう時にコーヒー片手によく言っていた言葉です。一度、仕事に取り掛かったからには、鬼の気迫でこの仕事を完遂させてやる。この姿をよく見ておれ、娘。そんな意味だと思います。下の姉は、女子大でお茶を教えてくださいますが、一番この言葉に影響され、鬼は無理でも、子鬼ぐらいにはなろう！と目指しているそうです。

仕事以外に関しましては、世間知が低いというのか、たまに思わぬことをやってくれます。母がいない時にご飯を炊こうとして、電気炊飯器をガスにかけたことがありました。学校から帰ったら煤だらけの電気炊飯器があり、びっくりしました。

笑った写真を見ていると好々爺ですし、お嬢様3人で可愛がられたでしょ、と他人様によく言われました。しかし、一緒に生活する者は気を遣って大変なのですね。自分たちが結婚してみても初めて、普通の家はこんなに自由で気楽なんだ、と実感したのも、たぶん娘3人の共通した感想だと思います。つつがなく結婚生活を送れているのも、この父と一緒に暮らした体験、これがあつたなればこそと、今では父に感謝しております。

## (3) 教え子の皆さまからみた唐澤富太郎

次に教え子の方の寄稿文を、ご紹介したいと思います。父の信条の1つに、「著書等身」という言葉があります。自分の研究成果を身長と同じくらいの沢山の本として出版する、という目標です。実際にそれをやり遂げたわけですが、その為に関で研究のお手伝いをしてくださる学生さんを求めておりました。当時は振り返ってこんなご証言がありますので、ご紹介したいと思います。

小久保明浩氏（武蔵野美術大学名誉教授）「抜き書きの仕事に2週間、午前10時から夜8時まで、一段落した後に発熱して3、4日寝込んでしまった」

内田勝氏（講談社・週刊『少年マガジン』第3代編集長）「『実は今、自宅で研究を手伝ってもらえる人を求めています。君たちの中で希望者はいませんか』・・・そのまま茗荷谷の学舎から豊玉の先生のご自宅へ拉致同然に連れていかれてしまった」

廣瀬久允氏（青山学院大学名誉教授）「先生から時々電報を頂いた。その文面は決まって『オネガイシマス カラサワ』というもの」

入江宏氏（宇都宮大学名誉教授、元日本女子大学教授）「私が辞去しようとする時、もう少し、もう少しと引き留められ、結局帰りはいつも西武池袋線の最終電車となった」

熱が出た方、電報の方、それから最終電車の方は、大学の先生になられました。とくに、入江先生は女子大学でも教鞭をとっておられました。拉致された方は、講談社の『少年マガジン』の名編集長で

「巨人の星」や「明日のジョー」など名作をプロデュースなさった内田勝さんという方です。

この内田さんが、このように聞かれたそうです。教育の要諦、つまり、教育の肝心な点は一言で言ってなんでしょうか。これに対して、

「先生は、即座に、『それは薫陶です』と明言され、宮大工の話为例として引かれた。棟梁は徒弟たちに直接には何も教えたりしないが、カンナを研ぐにせよ、柱を削るにせよ、仕事に丹精を込める自らの姿（全人格）によって、知らず知らずのうちに徒弟たちを感化せしめ、立派な職人たちが育てられていくのだと“薫陶”の意味を丁寧に説かれた。それはそのまま教育者としての唐澤先生ご自身に当てはまるお話しでもあった。この“薫陶”の二文字は、自分が職場において上司の立場にある間、一刻も忘れることはなかったつもりである。部下を働かせるのではなく、自分自身が一心不乱に働けば、それで十全の社員教育たり得るのだ」

さすが名編集長の名文です。教育というのは言葉じゃないのだ、自らが一生懸命働き、その生き様を正直に見せる、そのことこそが周りの人の心に響いて、最大の教育的な効果が上がる、と父は考えていたようです。父の場合でしたら、研究に必死に取り組む、その姿を学生さんに見せることこそが教育、と考えていたわけです。一生の思い出になるような大変な体験をなさった学生さんも研究者の道に進まれましたし、内田さんのように、ご自身の人生観に大きな影響を与えたとおっしゃってくださる方も沢山います。

本当にいろいろ、ご迷惑をおかけしたと思いますけれども、教育者としての本分も果たせていたのではないかと、娘としては少しホッとしております。

## 6. 博物館の歴史

### (1) モノと心

博物館の歴史についてですが、まず、何でモノなのかということをお話しします。実はこれには苦い思い出があるのですが、2011年「ちい散歩」という番組で地井武男さんが取材にみえました。

私が館内をご案内して撮影が終わりホッとしておりましたら、地井さんがパネルを見て、「あっ、ここにこんなに良いこと書いてあるのに、何で言わなかったの」とおっしゃったのです。その言葉という

のが、父が来館者の方に向けて書いた「モノには私たち先祖の知恵と心が凝集されている」という言葉なのですね。知恵と心がこもっているモノだからこそ、苦勞して集めて、こうして博物館まで作ったんでしょ、そこを言わなきゃ駄目じゃないの、と地井さんはおっしゃりたかったのだと思います。

それ以来、父が言いたかったこの言葉の意味について、ずっと考えているわけです。モノに知恵が込められているというのは分かります。さきほど、ご覧いただいたモノにも、昔から受け継がれてきた知恵、それから新しく創意工夫された知恵、いろいろ見て取れます。

では、モノに込められた心は、どうしたら見られるのでしょうか。何かヒントになる言葉はないかしらと、父が書いたものをバラバラ捲っておりましたら、この「物心一如」という言葉が目飛び込んで来ました。これ見た時に、あーこれだと思ったのですね。「物心一如」というのは、物質と精神が一体であるという、仏教的な世界観を表す言葉です。どうしてこれだと思ったかと言いますと、集めてきたモノを父が見ている時、それはそれは愛おしげで、文字通り目の中に入れても痛くないという感じで見ているのです。父自身も「モノに対する時は、すべてを忘れてその中に溶け込む」と表現しています。

これは、尋常ではないですよ。つまり、「物心一如」の精神でモノを見れば、モノは単なる物質ではなくて、そのモノを作った人とか、使った人とか、先人の精神と、時空を超えて会話ができる。そんな風に父は考えていたのではないかと思います。たしかにモノには、それだけの力があると思いますが、やはり見る側の力量が必要なようです。私にとりましては、まだまだ遙か彼方の境地といった感じでした。

### (2) 収集のきっかけ

モノの重要性に気がつきコレクションを始めたきっかけですが、昭和37（1962）年、ユネスコから世界の教科書について講演を依頼されました。場所がドイツでしたので、教育視察旅行を兼ねようということで、16か国いろいろな国を回りました。

これは、アメリカの地元紙が、日本のプロフェッサーが教育学の研究のために来た、と紹介した新聞です。右のお嬢さん二人は、父が御世話になった

ソーレンさんという方のお嬢さんですが、おもてなしの意味で浴衣を着ていて、可愛らしいですね。

父が、ヨーロッパを見て感じたことは、皆さんも行かれてよくご存じかと思いますが、何百年も経った石の建造物が残されていますよね。そこに今もなお、人が住み続けている、とても伝統を大切にしていると思ったそうです。

その旅の最後にボストンミュージアムを訪れました。ボストンミュージアムは日本コレクションでも有名です。父は、そこで木と竹と和紙を使った日本文化の見事さを再発見したと言っております。西洋の石の文化に比べても日本文化は決して引けを取らない、と誇りを感じたそうです。それと同時に、伝統を大事にする欧米人に比べて、日本人が自分の国の文化の見事さに気づかないで、こんなに沢山、文化財を海外に流出させてしまっていることに、憤りを感じたそうです。

今、ボストンミュージアムのお里帰り展で伊藤若冲や浮世絵を見ますと、これが日本に残っていたらどんなに良かったらと思うのですが、そのようなことを当時の父も感じたようです。失われてからは遅い、とにかくこれは早く集めなくてはと思ったそうです。

もっとも父が集めようとしていたのは教育史の史料ですので、このように海外に流出する恐れはないのですが、昭和37年という時代は日本の高度経済成長期、価値観が一変してしまい、古い物はバンバン捨てられていった時代でした。教育史の史料も廃棄されてしまう恐れがあったのです。帰心矢の如し、の思いで日本に帰って来たと言っております。

### (3) 収集のエピソード

それからが大変でした。当時は、宅急便なんて便利なものはありません。基本、手で担いで持って帰るわけです。先日、父のコレクションのお手伝いをしてくれた学生さん、といいましても現在は大学の先生ですが、お話を伺いましたら、餅つきの臼を大風呂敷に包んで二人で持って帰ったそうです。しかも臼だけではなくて、杵もあったそうです。2人で10歩進めては、また杵のある所に戻って10歩進めて、それを繰り返して、埼玉県から練馬の我が家まで運んできたとのことでした。

この博物館の階段の手すり、鳥取県の明治の学校



写真8 唐澤博物館の階段

で実際に使われていた手すりです。洋風のなかなかお洒落な学校だったのですが、新校舎への建て替えが決まり、解体されて製材所にあったそうです。部分だけでも保存しておきたいとの思いで、貨車1台借り切って、運んで来ました。

中には、尋常な手段ではなかなか手に入らないものもあります。さきほどご覧いただいた墨塗り教科書、あんな墨塗ったものは古本屋さんでは売っておりません。どうやって集めたかといいますと、今で言う廃品回収業の方たちに声をかけて集めました。

収集の方針は、同じものでも買えるものはすべて買う、さきほどご覧いただいたような筆箱、文鎮、天神様、何でも数を沢山集めれば、時代の変遷がよく分かる、と考えていました。

また、誰もが持っていて、とっておく必要がないと思うようなつまらないモノ、そういったモノこそ、父が求めていたものです。それだけ多くの方に影響を与えたということで、教育的には稀少価値のあるものより、より重要と考えていたからです。これは結構、先見の明がありました。つまらないモノこそ、意外と残っていないものです。父のコレクションの話は、自分でも本を書いています。タイトルは『執念』（講談社刊）です。

### (4) 博物館揺籃期

博物館を作る前から父のコレクションは、マスコミの間で有名でした。

左は、昭和36(1961)年の『週刊読売』です。「教科書に溺れた教授」とは、凄いタイトルですが、

欧米に行く前の、教科書研究を必死にやっていた時の取材ですね。日本の教科書の他に54か国の教科書を集めて、比較研究しておりました。本の重みに耐えかねて、床が抜けていた時代の話です。

右は、昭和40（1965）年の朝日新聞です。もう半世紀も前ですね。「自宅に教育博物館」と書いてありますが、まだ博物館の建物ができる前で、人とモノが一緒くたに生活していた時代です。この記者の方が、「あらゆる空間は史料のためにあり、人はその中に間借りしている状態」と書いていますが、まさに、私の子ども時代はそんな感じ。ダイニングから居間、階段、廊下、お風呂、トイレに至るまでモノであふれていました。今流行のシンプルライフと対極的な子ども時代でした。

## （5）収蔵庫時代

この写真は昭和43（1968）年、鉄骨3階建ての収蔵庫を作ったときのもの、非常に嬉しそうな顔をしていますね。舟板を利用して、父が「教育博物館」と書いて、看板を掲げていました。当時は明治100年ということで、我が家の史料は引っ張りだこでした。デパートで展覧会を開催することが多く、新宿の小田急百貨店でもワンフロアを借り切って展覧会をしました。

時には、教育界の古道具屋さん、と揶揄されたこともありましたが、父はそういわれてもまったく意に介さず、モノを通して教育史を研究するという自らの研究方法を、いつもニコニコしながら話してお



写真9 唐澤先生と収蔵庫

（唐澤るり子氏提供）

りました。

テレビやラジオにも、よく出演していました。これは「徹子の部屋」の前の番組ですが、黒柳さんの番組にも呼ばれていました。

皆様にご覧いただける念願の唐澤博物館がオープンしたのが、平成5（1993）年です。父が外国に教育博物館がないのを見て、日本に是非作りたいと思ってから30年の月日経ってしまいました。開館してからは、80歳を超していましたが、率先して館内をご案内しておりました。やはり、実物の持つ迫力と、モノを通してその時代を体験することを、皆さんに経験していただきたかったのだと思います。

このように唐澤博物館は、すべてが唐澤富太郎という一人の人の視点で集めたものを展示しております。

その目指すところは「生活を通して、いかに日本人が形成されていったのか」を、モノを通して実証したい、そんな一研究者の純粋な情熱でできた博物館だと思っています。父が至らなかった一つひとつの精緻な研究は、これからの皆様にお力をお借りしたいと思います。

最後までお聞きくださいませ、本当にありがとうございました。

## V. 質疑応答

講演終了後、参加者たちは、事前に配布された質問カードに、それぞれの感想や質問等を記入した。その後、フロアとの意見交換がおこなわれた。具体的には、以下の質問が出された。その一部を紹介する。

まず、「この貴重な資料がたくさんある博物館の維持管理上のご苦労は、どんなことでしょうか。」（卒業生）や「唐澤先生を支え続け、今も博物館を守り続けているご家族との絆の強さを感じた。唐澤先生の常に研究のことを考え続け、古い本を探し集めていたということに驚かされた。私もぜひ博物館に行ってみたいと思った。どうして三女である、るり子さんが博物館を継ぐことになったのですか。」（教育学科1年生）といった博物館の運営や維持管理に関する質問が出された。

また、当時の「大学の授業内容は、どうだったか

知りたいです。」(卒業生)という質問や「是非伺いたいです!開館日・時間・最寄駅をお知らせ下さい。」(卒業生)という声も多く聞かれ、教育学科の会で唐澤博物館見学ツアーを企画したいという参加者もいた。

そして、何よりも多く出された感想が、唐澤富太郎先生の研究観・研究姿勢に関するものである。卒業生からは、「最近、『あさが来た』の視聴から、日本女子大学卒業生であることの誇りを痛感していました。今日は、さらに「日本教育史」-「生活教育史」を提案された唐澤富太郎氏の熱意と研究の真髓を聞いて「生活の中にこそ、人として形成されていく根本がある」ということを実感しています。」(卒業生)という感想や「唐澤先生の研究の足跡を分かり易く説明していただき、実際に教育博物館を見学させていただきたく思いました。“自らの姿勢が教育である”という先生の言葉が心に残りました。」(卒業生)という感想があった。また、在校生からは、「唐澤富太郎先生の教育に対する熱心な思いが伝わってきました。私は高校1年生の時くらいから学校教育に興味を抱き始め、調べ学習に取り組んだことがありましたが、本などの資料を読むという手段しか思いつきませんでした。今日の講演会を通して、物から過去を追うこともできるのだと思いました。」(教育学科1年生)といった率直な感想が寄せられた。

## VI. 御礼と閉会の挨拶

最後に、田中雅文教授によって、御礼と閉会の挨拶が述べられた。

田中です。唐澤る子様、素晴らしいご講演をありがとうございました。最後のほうで仰っていた、「生活を通して、いかに日本人が形成されていったか」ということ、これがつまり唐澤富太郎先生が目指しておられた視点ということですが、今日の教育学に対してとても重要なメッセージを投げかけていると感じました。

というのは、学校教育のような法制度にもとづく教育活動ではなく、日常の生活のなかで子どもたちが学び、成長していったという点に着目し、そのような学びと成長の環境をあらゆる角度から研究しようとしたことに大きな意味があると思うからで

す。現在の教育学の言葉でいえば、インフォーマル・エデュケーション、インフォーマル・ラーニング、偶発的学習などと呼べるでしょうか。そうした現象に対し、独自の視点に基づいて「モノ」を媒介に迫っていったのが唐澤先生だったと、改めてその斬新なアプローチに感動しました。

本日は、学生たちにとって、また卒業生の方々にとって、教育というものを新しい角度から見直す貴重な機会になったと思います。そのような機会を与えていただいた唐澤る子様、心から感謝申し上げます。

## 【補足情報】

- 1) 唐澤博物館の所在地は、東京都練馬区豊玉北3-5-5である。電話予約制(03-3991-3065)となっている。アクセス等の詳細は、唐澤博物館ウェブページを参照されたい。URLは、以下の通り。<http://karasawamuseum.com>
- 2) 唐澤る子様は、三省堂ワードワイズ・ウェブにおいて、「モノが語る明治教育維新」といった連載をおこなっている。唐澤富太郎や博物館の詳細を窺い知ることができる。URLは、以下の通り。<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/>(2016年11月11日閲覧)

## 【参考文献】

- 入江宏「唐澤富太郎先生を憶う」『人間研究』第41号、2005年、pp.129-132。
- 唐澤富太郎『日本教育史』誠文堂新光社、1968年。
- 唐澤富太郎「伝承と日本人の形成 - 「教育博物館」の刊行にあたって -」『人間研究』第13号、1977年、pp.93-99。
- 唐澤富太郎「実物による教育史研究 - “生活”を通しての日本人の形成 -」『人間研究』第16号、1980年、pp.6-16。
- 唐澤富太郎「これからの日本人の形成を考えるために」『人間研究』第16号、1980年、pp.17-30。
- 唐澤博物館十周年記念誌「愚徹」編集部編『愚徹』唐澤博物館、2005年。
- 森川輝紀「日本教育史研究の系譜」『福山市立大学教育学部研究紀要』第4巻、2016年、pp.117-127。

